

令和2年度第1回島田市文化芸術推進協議会 議事概要

1 日時 令和3年3月11日(木) 午前10時45分～午前12時00分

2 場所 島田市役所 第3委員会室南

3 出席者

(1) 委員 松本委員、森澤委員、小栗委員、高島委員、高橋委員、松永委員、山本委員、片川委員

(2) 事務局 産業観光部 谷河部長

産業観光部文化資源活用課 松本課長、大谷係長、相田事務員

(3) 傍聴者 0名

4 概要

- (1) 開会
- (2) 委嘱状交付
- (3) 部長挨拶
- (4) 正副会長選出
- (5) 会長挨拶
- (6) 議事

○協議事項

(1) 島田市文化芸術推進計画書の評価指標の設定と進捗管理について

「○」委員からの質問・意見等 「→」事務局からの回答等

- ：島田の逸品の中のふりちゃけのネーミングがよい。購入したいと思った時、どこで購入できるか。市の魅力を世界、日本へ発信するためと示しているが。市外、県外へどのように発信をしているか。
- ：島田市の通販サイト(ECサイト)を来年度以降、運営検討しており、その中で購入することができ、発信していく。
- ：年長児遠足事業は感覚として、島田市の文化資源を大人と同じレベルで紹介しても年長児は理解できないと思う。年長児でも理解できる説明や仕掛けをするべきである。

- ：どのような方法で事業を実施しているか情報収集しきれていない。情報収集次第、メールで回答する。目的としては、まず文化に触れることで理解させるのではなく、こういった文化資源があるという認識をさせることが狙いの事業である。
- ：小学生3年以上の年齢でなければ理解することは難しいかもしれない。年長児には島田の資源である機関車トーマスなどを活用して、楽しく文化に触れるという取組のほうが効果的だと考える。事務局には、戦略的に検討をして欲しい。
- ：諏訪原城跡に行ったことがない。市民として見どころを理解できていない。市民にもっと周知をするべき。島田の逸品の販売場所など知らないことが多い。
- ：島田市役所の新築時に販売所などを製作してもいいかもしれない。
- ：諏訪原城応援隊のメンバーは何人ほどいるのか。
- ：春風亭昇太師匠、加藤理文先生、島田市出身の片川アナウンサーが現在の応援隊のメンバーである。
- ：諏訪原城応援隊によるイベントなどは開催しているのか。
- ：今年度イベントを開催した、来年度も開催する予定である。
- ：ふるさと納税の返礼品ラインナップに「島田の逸品」は入っているのか。
- ：入っている「島田の逸品」もある。
- ：宣伝もかねて「島田の逸品」を返礼品ラインナップへもっととりいれるべきである。
- ：「島田の逸品」に認定件数の上限などはあるか。
- ：特に定めていない。市が定めている基準を超えていれば認定件数は増える。
- ：50件など多く認定されることもあるか。
- ：考えられる。
- ：件数が多くなってしまうと特別感はなくなってしまうと考えられる。
- ：ふるさと納税の寄附件数が増加している理由はなぜか。
- ：増加している理由は、トイレトペーパーなどの消耗品が人気であるため。本来のふるさと納税の趣旨がずれてしまっている。物が欲しいので、寄附するという流れになってしまっている
- ：諏訪原城関連の返礼品はあるか。
- ：諏訪原城 T シャツがあるが、宣伝不足により、返礼品としては、まだ選ばれていない状況となっている
- ：諏訪原城は、お城の専門家の小和田先生、三浦先生などが関わっているお城だが、石垣、城郭がないお城であるため、一般の方々は行くのがっかりするかもしれない。

島田市だけで売り出すことは難しく、広域行政で協力しなければ難しいと考えられる。価値は充分にあるため、どのくらい売り出すことができるか重要。

- ：諏訪原城の魅力の伝え方が重要である。発掘は終わっているのか。
- ：主要な部分の発掘は、大方終わっている。
- ：山城の復元は難しく、全国でも3カ所ほどのみ、復元されている。文化庁に認められて価値がでる。
- ：諏訪原城の見どころはなにか。
- ：諏訪原城ビジターセンターに島田工業高校の生徒が製作した諏訪原城再現ジオラマがあり、見どころである。
- ：新型コロナウイルスの影響で実施が難しいと事業が多いと思っていたが、予想外に実施できていたので大きな実績であると感じた。

評価指標の設定がイベントの回数などであり、年々回数を増やすことしか評価に繋がらず、人手やお金がかかる。どんどん自治体が疲弊してしまう。事業の成果の質の部分を評価指標に入れることが必要である。諏訪原城応援隊のイベントの評価指標の案としては、結果としてイベントの参加者数、応援隊の参加者数、ボランティアの人数など継続的に評価できる部分を評価指標にするべきである。アンケートなど簡単に集計することができる。

評価の対象の主体が自治体となっている。過去の計画策定委員会では色々な課から市民を育てたい、担い手を増やしたい、市民主体で活動して欲しいという意見がでていた。自治体主体で活動を行った結果、市民が担い手につながったことを内容とするべき。そうしなければ自治体のマンパワーや資金がなくなったら事業が終わってしまう。

改めて計画を拝見して島田市には、たくさんの資源があることがわかった。自治体がやりましたという内容ではなく、色んな人が自分たちでなにかやりたいという、後押しのほうがいいのではないかと思います。

- ：この評価のままでは、数を増やすだけで疲弊してしまう。市民に引き継いでいった事業内容、持続可能な事業になった仕組みづくりが評価されることが望ましい。連絡会で報告して欲しい。
- ：定性的評価が望ましい。
- ：定性的評価は、インタビューすることなどが必要であり、時間がかかってしまう。アンケート項目に内容を分析できる項目をつけて評価指標にすれば、定量的な部分と質も評価することが可能である。
- ：例えば、諏訪原城応援隊の立ち上げなどは、評価の対象とはせず、春風亭昇太師匠が諏訪原城を説明し、価値をわかった人数などを評価することが定量的な部分と質も評価するということである。

○：島田市民の人としての文化の意識があるかどうか。交流がなければ市民の意識付けは進んでいかない。地元住民が地に足をつけた文化の発信をしなければならない。

諏訪原城の見学などどのように発信したのか知らなかった。市民に対しての広報活動も重要。

○：島田市のシンボルは川越遺跡となるのか。

○：金谷にある石畳もシンボルである。一人一石運動で作られた道。近隣住民は石畳に草が生えているが市役所が草抜きをやればいいと発言している。現在の市民の文化の意識、観光の意識はこのレベルになってしまっている。

地元住民が観光で生かされているという意識を植え付けていかないとならない。年長児遠足など幼少の時から文化に触れる機会はとても重要である。特に小学3年生までに学習するとがよい。郷土を愛する原動力を育むことが重要。

(7) その他

- ・令和3年度の協議会日程について

(8) 閉会